ISNN 0913-6754

Southern Review

Studies in Foreign Language and Literature

No. 16

December 2001

```
          SSS
        SSSSSSSSS
    SSSSSSSSSSSSSSSSSSSS
  SSSSS                 SSSSS
SSSSSSS   SSSSSSSSSSS   SSSSSSS
  SSSSS    SSSSSSSSSSSSSSSSSS
SSSSSSS                 OUTHERN
   SSSSSSSSSSSSSSSSSSS  SSSSS
SSSSSSS   SSSSSSSSSSS   SSSSSSS
  SSSSS                 SSSSS
    SSSSSSSSSSSSSSSSSSSS
        SSSSSSSSS
          SSS
```

```
      FOREIGN LANGUAGE &
 LITERATURE SOCIETY OF OKINAWA
RRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR
RRRRRR                  RRRRRR
RRRRRR   RRRRRRRRRRR    RRRRRR
RRRRRR   RRRRRRRRRRR    RRRRRR
RRRRRR                  RRRRRR
RRRRRR   RRRRRR   RRRRRRRRRRRR
RRRRRR   RRRRRR   RRRRRRRRRRRR
RRRRRR   RRRRRR        EVIEW
RRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRRR
RRRRRRRR              RRRRRRRR
RRRRRRRR              RRRRRRRR
```

沖縄外国文学会

FOREIGN LANGUAGE & LITERATURE SOCIETY OF OKINAWA

Southern Review No.16, 2001

日本語の「非論理性」：文構造形成における日英語の相違

南山大学人文学部人類文化学科
斎藤　衛

1. 序

Hale（1980）を一つの契機として、以来20年の間に、日英語の相違をより抽象的なレベルで捉えようとする様々な試みがなされてきました。本論文では、一見「不可解」にみえる日本語の現象を二つとりあげ、文構造における日英語の相違について考えます。

第一の現象は、自由語順です。日本語においては、(1a) のSOVが基本語順ですが、目的語を前置した（1b）のようなOSVの文も可能です。

(1)　a.　花子が　その本を　読んだ
　　b.　その本を　花子が　読んだ

ここで適用される移動規則が、スクランブリングです。第2節で詳しく論じますが、この規則は、(2b) に示されている英語主題化とは異なり、文の意味表示に直接反映されるものではありません。

(2)　a.　Mary read that book
　　b.　That book, Mary read

意味解釈に寄与しないこのような「意味不明」な規則の存在が、日本語の際立った特徴の一つであると言うことができます。

本論文で扱う第二の現象は、(3b) に例示されている日本語軽動詞構文です。

(3)　a.　太郎が　村の人たちに　狼がくると　警告した
　　b.　太郎が　村の人たちに　狼がくると　警告を　した

(3a) は、「警告した」という述部が、「太郎が」、「村の人たちに」、「狼がくると」という三つの項をとる普通の文です。それに対して、(3b) は、Grimshaw and Mester (1988) が詳細に議論しているように、「非論理的」です。意味上の述部である「警告」が直接目的語の位置にあり、本来述部が表われるべき動詞の位置には、意味をもたない軽動詞の「する」があります。この構文については、第3節でとりあげます。

では、日本語は、「意味不明」で「非論理的」な言語なのでしょうか。この問いに

答えるために、まず、第4節で、極小主義理論（Chomsky 1995）において提唱されている句構造形成のメカニズムを概観します。そして、第5節において、このメカニズムに従えば、スクランブリングも軽動詞構文もあって然るべき現象であることを示します。日本語は、必ずしも「非論理的」なのではなく、極めて極小主義的な言語なのです。さらに、この結論を受けて、英語の特性について再考します。なぜ、英語には、スクランブリングも軽動詞構文も存在しないのでしょうか。英語においては、句構造形成のメカニズムに厳しい制限があるようです。詳しい議論は、第5節に譲りますが、日本語では、句構造が自由に生成され、最終的に意味解釈が行われればよいのに対して、英語では、句構造形成のプロセスの一つ一つが、意味解釈に寄与するものでなくてはならないという結論に至ります。特徴を捉えて言えば、句構造形成において、日本語は大ざっぱであり、英語は厳格であるとも言えましょう。

2. スクランブリング

まず、日本語スクランブリングの特徴を、WH移動、主題化といった演算子移動との対比において考えてみましょう。

英語のWH移動は、演算子－変項の関係を形成し、意味解釈に寄与します。例えば、(4a) の場合、CP指定部の 'what' を '[For which x: x a thing]'、痕跡を変項 'x' とすることによって、(4b) の意味表示が導かれます。

(4) a. What did John buy *t*

b. [For which x: x a thing] John bought x

主題化についても、同様のことが仮定されており、(5a) の意味表示は、(5b) のようになります。

(5) a. That book, Mary read *t*

b. [For x: x = that book] Mary read x

スクランブリングは、表面上、英語主題化に類似していますが、(6) において、前置された目的語は、主題として解釈されるのでしょうか。

(6) その本を花子が *t* 読んだ

データを見る限り、答えは否であるようです。

主題化とスクランブリングを区別する根拠の一つとして、前者とは異なり、後者は、自由にどのような句にも適用されることがあげられます。まず、(7b) の主題化の例をみてみましょう。

(7) a. Who said [$_{CP}$ that John bought that book]

b. Who said [$_{CP}$ that that book, John bought *t*]

この例は、主題化が補文内でも可能であることを示しています。主題文の文法判断については、個人差がありますが、判断が寛容である人にとっては、(7b) は問題のない文です。しかし、そのような人にとっても、(8b) は完全な非文です。

(8) a. Who said [$_{CP}$ that John bought which book]

b. *Who said [$_{CP}$ that which book, John bought *t*]

すなわち、(9) の一般化が成立します。

(9) Wh句を主題とすることは、できない。

他方、(10) に示すように、スクランブリングは、WH句にも自由に適用されます。

(10) a. 太郎は [$_{CP}$ その本を花子が *t* 買ったと] 思っている

b. 太郎は [$_{CP}$ どの本を花子が *t* 買ったと] 思ってるの

ここで、(9) の一般化が日本語にもあてはまることに留意してください。日本語の主題は、典型的には副助詞の「は」を伴って表われますが、WH句と「は」は共起できません。従って、(11b) と (11c) の間には、文法性に対比がみられます。

(11) a. その本は 太郎が 買ったの

b. どの本を 太郎が 買ったの

c. *どの本は 太郎が 買ったの

(9) を仮定しますと、(10b) および (11b) は、スクランブリングが主題化とは異なることを明確に示す例であると考えられます。

さらに、スクランブリングは、主題化ではないのみならず、文の意味表示に全く影響を与えないようです。WH疑問文の例をもう少しみてみましょう。

(12) a. Who wonders [$_{CP}$ where John put what]

b. Who asked whom to find out [$_{CP}$ what Mary bought]

CPの指定部に移動したWH句は、その位置で解釈されます。(12a) について言えば、'who' は主文を、そして 'where' は補文を作用域とします。では、移動しなかった 'what' は、どのように解釈されるのでしょうか。このWH句は、主文でも、補文でも、作用域とすることができます。(12a) には、(13) に示す二つの解釈があるのです。

(13) a. [For which x, z: x a person & z a thing] x wonders [[for which y: y a place] John bought z at y]

b. [For which x: x a person] x wonders [[for which y, z: y a place & z a thing] John bought z at y]

しかし、移動しなかったWH句は、常に自由に解釈されるわけではありません。(12b) のWH句 'whom' は、主文でのみ解釈でき、補文をその作用域とすることができません。そこで、WH句の解釈については、以下の一般化が成立するものと思われます。

(14) Wh句は、それを含む疑問文においてのみ解釈されうる。

この現象は、(15a-b) のような例においても観察されます。

(15) a. Who knows [$_{CP}$ [$_{NP}$ which picture of whom] Bill bought]

b.??[$_{NP}$ Which picture of whom] does John wonder [$_{CP}$ who bought]

(15a) では、van Riemsdijk and Williams (1981) が指摘しているように、二つの解釈が可能です。'Who' と 'which' は、それぞれ、主文と補文を作用域としますが、'whom' は、主文でも補文でも解釈することができます。ところが、このあいまい性は、(15b) では観察されません。

この例は、下接の条件に抵触しますので、文法的ではありませんが、可能な解釈は明確です。'Whom' は、補文には含まれていませんので、主文でのみ解釈できます。同様の結論が、(16) の例からも得られます。

(16) a.??Who said [$_{CP}$ that [$_{NP}$ the man that bought what], John knows [$_{CP}$ who likes]]

b. *Mary thinks [$_{CP}$ that [$_{NP}$ the man that bought what], John knows [$_{CP}$ who likes]]

(16a) は、主題化の文法判断において、極めて寛容な話者にとってのみ許容されうる文ですが、主題に含まれる 'what' は、最も深く埋め込まれた疑問文では解釈できず、主文だけがこのWH句にとって可能な作用域となります。(16b) では、このWH句を含む疑問文がありませんので、WH句が解釈されず、文そのものが非文法的になります。

英語の例に則して、(14) の一般化について考察してきましたが、この一般化が日本語にもあてはまることが、Harada (1972) によって指摘されています。(12b) に対応する日本語の例をみてみましょう。

(17) だれがだれに [$_{CP}$ 花子が 何を 買ったか] 調べるように頼んだの

この文では、「だれが」と「だれに」は、主文にのみ含まれていますので、いずれも補文で解釈することができません。従って、この文を (18a) の意味にとることはできますが、(18b) は解釈として不可能です。

(18) a. [For which x, z: x a person & z a person] x asked z to find out [for which y: y a thing] Hanako bought y

b. [For which x: x a person] x asked z to find out [for which y, z: y a thing & z a person] Hanako bought y

また、(19) では、「だれに」を含む疑問文がありませんので、WH句が解釈を受けられず、(14) の予測通り、文そのものが非文となります。

(19) *太郎がだれに [$_{CP}$ 花子が 何を 買ったか] 調べるように頼んだ (こと)

以上の議論をふまえて、(20b) のスクランブリングの例を考えてみましょう。

(20) a. 太郎が [$_{CP}$ 花子が どの本を 図書館から 借り出したか] 知りたがっている (こと)

b. どの本を 太郎が [$_{CP}$ 花子が *t* 図書館から 借り出したか] 知りたがっている (こと)

(20a) は、疑問文を補文としてもつ普通の文です。(20b) は、どうでしょうか。この

例では、WH句の「どの本を」が、スクランブリングによって、唯一の疑問文である補文から取り出されています。このWH句を含む疑問文はありませんから、(14) の一般化によると、この例は、(19) と同様に、非文法的になる筈です。しかし、(20b) には、(19) で観察される非文法性は認められません。(21b) も同じ結果を示します。

(21) a. 太郎が [$_{CP}$ みんなが [$_{CP}$ 花子が どの本を 図書館から 借り出したと] 思っているか] 知りたがっている (こと)

b.??[$_{CP}$ 花子が どの本を 図書館から 借り出したと] 太郎が [$_{CP}$ みんなが *t* 思っているか] 知りたがっている (こと)

(21a) では、WH句の「どの本を」が、最も深く埋め込まれたCPに含まれています。このCPを、スクランブリングによって、「みんなが」を主語としてもつ疑問文のCPから取り出して生成されたものが、(21b) です。この文でも、WH句が疑問文に含まれていないにもかかわらず、(19) と同程度の非文法性は観察されません。

(20b)、(21b) の例は、スクランブリングが、意味表示に反映されないことを示唆します。WH句が、スクランブリングによって疑問文から取り出されても、あたかも移動が適用されず、疑問文内にあるかのように解釈されるのです。この点において、スクランブリングと主題化は、対照的です。もし、主題化も意味表示に反映されないのであれば、(21b) の場合と同様に、(16b) のWH句も疑問文内で解釈されうる筈です。主題は、WH句が解釈を受ける意味表示において、CP指定部の位置にあって演算子として解釈されるのです。それに対して、スクランブリングによって前置された要素は、あたかも移動されなかったかのように、元の位置で解釈されます。

スクランブリングを有する言語としては、日本語とともに、ドイツ語、ヒンドゥー語がよく言及されます。しかし、意味表示に反映されない、いわば、「意味不明」なスクランブリングの存在は、日本語、韓国語に特徴的であるようです。ドイツ語のスクランブリングは、WH句には適用されません。また、表面的には、日本語に類似するヒンドゥー語のスクランブリングも、意味表示に影響を与えるようです。Ayesha Kidwai 氏によれば、(20b) に対応するヒンドゥー語の (22b) は、非文です。

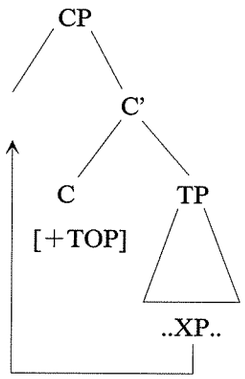
(22) a. ye baat [kii raam jaanna caahtaa hE [kii siitaa-ne laibrerii-se kOnsi kitaab nikaalii]]
this talk that Ram to know wants is that Sita-erg library-from which book took-out
'the fact that Ram wants to know which book Sita took out from the library'

b. *ye baat [kii kOnsi kitaab raam jaanna caahtaa hE [kii siitaa-ne laibrerii-se *t* nikaalii]]
this talk that which book Ram to know wants is that Sita-erg library-from took-out

このことは、ヒンドゥー語のスクランブリングによって前置された要素は、意味表示においても、その位置に留まることを示唆します。

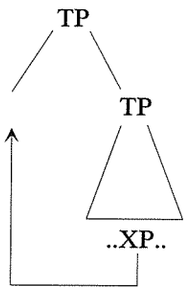
では、英語主題化と日本語スクランブリングの相違は、統語的には、どのように捉えられるのでしょうか。WH疑問文では、C(omp) が [+WH] の素性をもち、指定部にWH句を要求するとされています。この要求を充たすために、WH句が文頭に移動するわけです。同様に、主題文の場合も、C が [+TOPIC] の素性をもち、そのために、主題が C の指定部に移動すると考えられます。

(23)



こうした移動は、必要があって適用されるのですから、義務的です。CPの指定部に移動した要素は、その位置で、WH演算子または主題として解釈されます。他方、スクランブリングは、随意的な移動規則ですので、主要部の要求を充たす必要があって適用されるわけではありません。単に要素が前置され、文頭に表われます。

(24)



文が主題文ではありませんので、移動した要素は、主題としては解釈されませんし、移動も、談話のレベルでは有意義であっても、意味表示には反映されません。

3. 軽動詞構文

第 2 節で、日本語が、意味解釈に影響しない「意味不明」な移動規則を有することを述べましたが、このことは、日本語に統語構造と意味構造の不一致がみられることを意味します。スクランブリングの適用は、統語構造のみを変化させるものであるからです。この「不一致」のもう一つの典型的な例が、Grimshaw and Mester (1988) において詳細に分析されている (25b) の軽動詞構文です。

(25) a. 花子が 太郎に 土地を 譲渡した

b. 花子が 太郎に [土地の譲渡]を した

(25a) では、動詞の「譲渡する」が、「花子が」(agent)「太郎に」(goal)「土地を」(theme) という三つの項をとります。(25b) は、意味的には、同様の述部－項関係をもつ文ですが、統語構造は異なります。意味上の述部である「譲渡」が直接目的語として表わされ、通常述部がある動詞の位置には、意味をもたない軽動詞の「する」が置かれています。Grimshaw and Mesterによれば、このような軽動詞構文は、意味上の述部－項構造と統語構造が矛盾する、いわば、「非論理的」な構文なのです。

(25a) と (25b) が同じ述部－項関係をもつということについては、異論があるかもしれません。「する」は、(26) にみられるように、意味をもった主動詞としても機能しますので、(25b) において、意味的にも、「する」が述部であり、「土地の譲渡を」が直接目的語であると考えることもできそうです。

(26) 花子が [数学の宿題]を した

この分析が可能であれば、軽動詞構文とよばれるものは、存在しないのかもしれません。しかし、この点については、Sells (1988) が、説得力ある議論を展開して、軽動詞構文が実際に存在することを論証しています。Sellsの議論は、いわゆるdouble-*o* constraintに依拠していますので、まず、この制約を簡単に紹介しましょう。

Harada (1973)、Shibatani (1973)、Kuroda (1978) が示すように、日本語には、単文内に対格の「を」が二つあってはならないという制約があります。この制約は、使役文において、はっきりと具現化されます。

(27) a. 太郎が 走る

b. 花子が 太郎に/を 走らせる

(27b) にみられるように、使役文において、被使役者は、「に」または「を」を伴って表われます。しかし、(28b) が示すように、「を」が既に文中にある場合には、「に」のみが許されます。

(28) a. 太郎が 本を 読む

b. 花子が 太郎に/*を 本を 読ませる

(28b) で、被使役者を「太郎を」とした場合、項である名詞句が二つ「を」をもつことになります。こうした時に観察されるのが、強い double-*o* effectとよばれるもので、文は完全に非文法的になります。これに対して、一つの「名詞句を」が項ではない時に観察されるのが、弱いdouble-*o* effectです。(29b) では、「浜辺を」は副詞

的な要素ですから、「太郎」が「を」を伴っても、文が（28b）の場合ほどには非文法的になりません。

(29)　a.　太郎が 浜辺を 走る

　　b.　花子が 太郎に/??を 浜辺を 走らせる

Harada（1973）は、強いdouble-*o* effectと弱いdouble-*o* effectには、非文法性の程度に加えて、もう一つ重要な違いがあることを指摘しています。二つある「名詞句を」のうちの一つを移動によって文外に移しても、前者の文法性には、変化がみられません。(30a-b）は、(28b）を分裂文としたものです。

(30)　a. *[花子が 太郎を 読ませたの] は 本をだ

　　b. *[花子が 本を 読ませたの] は 太郎をだ

ところが、(29b）のような弱いdouble-*o* effectの場合は、移動を適用することにより、文を文法的にすることができます。(31）の分裂文は、文法的です。

(31)　a.　[花子が 太郎を 歩かせたの] は 浜辺をだ

　　b.　[花子が 浜辺を 歩かせたの] は 太郎をだ

このことから、前者は抽象的なdouble-*o* effect、後者は表層的なdouble-*o* effectとも称されています。

以上のdouble-*o* effectの特徴を考慮しますと、(32）に示す例が、軽動詞文の述部－項構造を探る上で、重要な手掛かりを提供することになります。

(32)　a.??花子が 太郎に 土地を 譲渡を した

　　b.??ホンダが オハイオ州で アコードを 生産を している

(32a）は、(25b）を少し変えたものです。「土地」が、属格ではなく、対格を伴っていますので、「を」が二つ表われます。Sellsは、まず、この種の文が、弱いdouble-*o* effectの例であることを指摘します。この考察は、(33a-b）の文法性によって支持されます。

(33)　a.　[花子が 太郎に 譲渡を したの] は 土地をだ

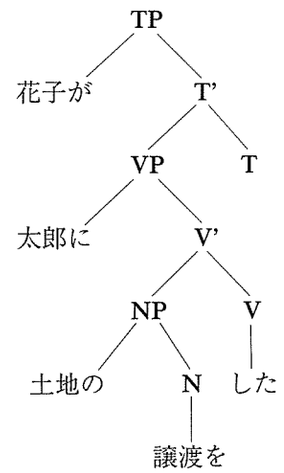
　　b.　[ホンダが オハイオ州で 生産を しているの] は アコードをだ

(29b）の場合と同様に、(32a-b）は、「を」を伴う名詞句を移動することによって、文法的にすることができるのです。では、(32a-b）の述部－項関係は、どうなっているのでしょうか。(32a）を例にとって、考えてみましょう。「する」が意味上の述部であり、「土地を」と「譲渡を」の両方を項としてとるのであれば、この文は、強いdouble-*o* effectを示す筈です。従って、この分析は維持できません。「土地を」は、明らかに項として機能していますので、「譲渡を」は、項ではありえないことになります。Sellsは、この名詞が副詞的要素とは考えられないことから、残された可能性として、述部であるという結論に達します。このことは、「譲渡を」が述部として機能することができ、動詞の「する」が意味をもたない要素でありうることを意味します。

Grimshaw and Mester（1988）の軽動詞構文は、実在するのです。

軽動詞構文の具体的な分析として、Saito and Hoshi（2000）では、意味解釈のための主要部移動を提案しています。(34）に示す（25b）の統語構造に基づいて、この分析をみてみましょう。

(34)



「譲渡を」は、既に、「土地の」を項（theme）としてとりうる位置にあります。しかし、このままでは、「太郎に」および「花子が」と述部－項の関係をもつことができません。そこで、適切な意味解釈を可能にするために、「譲渡を」が動詞の位置に移動すると考えられます。その段階で、「太郎に」を間接目的語（goal)、「花子が」を主語（agent）としてとるのです。

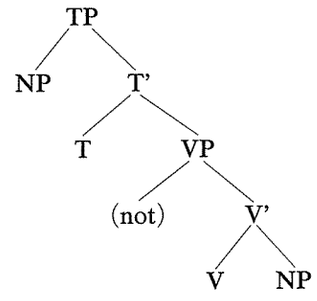
このような主要部の移動は、統語的な派生では、よくみられる現象です。まず、(35a）と（35b）を比べてみてください。

(35)　a.　John likes politics

　　b.　John does not like politics

時制は、通常、動詞に付随して表われますが、否定の 'not' がある場合には、時制を表わす要素として、'do' が用いられます。'Do-support' とよばれる現象です。文の構造をみますと、'do-support' の起こる理由がわかります。

(36)



否定の ‘not’ がない場合には、時制（T）が動詞に隣接しており、両者を一語として表わすことができます。しかし、‘not’ がある場合には、これは、不可能です。時制は、それ自体、独立した語とはなりえませんので、‘do’ の助けが必要になります。

他方、主動詞が ‘be’ 動詞であるときには、異なるパターンが観察されます。

(37) a. John is the best candidate

b. John is not the best candidate

Chomsky（1957）で詳細に分析されているように、このことは、‘be’ 動詞が、他の主動詞とは異なり、時制の位置に移動することを示します。疑問文においては、時制が前置されますが、予測通り、‘be’ 動詞も一緒に移動します。

(38) a. Does John like politics

b. Is John the best candidate

Saito and Hoshiの仮説は、このような主要部移動が、意味解釈のためにも適用されうるというものです。

軽動詞構文の主要部移動分析を支持する例としては、(39) をあげることができます。

(39) a. *[花子が 太郎に 土地を したの] は 譲渡をだ

b. *[ホンダが オハイオ州で アコードを しているの] は 生産をだ

弱いdouble-*o* effectを示す（32a）を分裂文として、「土地を」を焦点の位置におくと、文法的な（33a）を作ることができました。しかし、「譲渡を」を焦点とすると、文は、逆に完全に非文法的となります。この事実は、主要部移動分析の帰結として、説明することができます。(39a) では、「譲渡を」が、「太郎に」および「花子が」を項とするために、動詞の「する」の位置に移動しなくてはなりません。しかし、「譲渡を」は、焦点として文外にありますから、この移動は不可能です。従って、(39a) は、解釈されえないことになります。

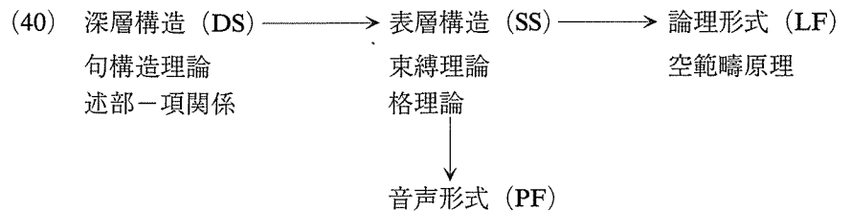
4. 極小主義理論における句構造

前節の議論において、日本語の統語構造が、意味上の述部－項関係を、必ずしも忠実に反映するものではないことが明らかになったかと思います。では、日本語は、「非論理的」な言語なのでしょうか。ある意味ではそうとも言えますが、この問題を統語理論との関係において捉えた場合には、異なる結論が得られます。本節では、極小主義理論における句構造形成のメカニズムを概観します。その上で、次節において、日本語が、「非論理的」というよりは、むしろ、極小主義的な言語であることを示します。

拡大標準理論（あるいは、LGB理論－Chomsky 1981）では、(40) の三つの表示

が仮定されています。

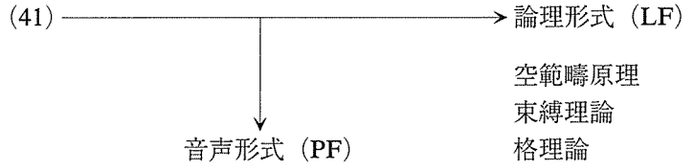
(40)



深層構造は、意味上の述部－項関係を投射し、句構造理論に沿ったものでなくてはなりません。表層構造では、束縛理論、格理論が適用されます。論理形式にかかる制約の代表的なものが、空範疇原理です。論理形式は、意味解釈部門との接点ともなります。この理論によりますと、軽動詞構文は、「非論理的」であるばかりではなく、そもそもありえない構文です。意味上の述部－項関係は、深層構造において表わされなければなりませんが、軽動詞構文では、この関係が、意味解釈のための主要部移動が適用された後、論理形式においてはじめて表示されます。例えば、(32a) は、意味上の述部－項関係を表わす深層構造をもちえません。

他方、極小主義理論（Chomsky 1995）では、深層構造と表層構造が除去され、論理形式のみが、統語理論の表示とされます。

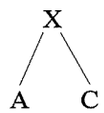
(41)



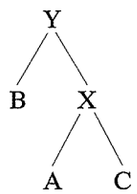
意味上の述部－項関係を表わす表示としての深層構造の余剰性は、すでに、Chomsky（1981）において指摘されていました。意味部門との接点をなす論理形式も、同様の情報をもつ必要があるからです。その後、Larson（1988）が、二重目的語構文の分析に基づいて、深層構造を除去すべき積極的な経験的根拠を示します。表層構造除去への動きは、Chomsky（1986）に端を発します。表層構造を仮定する最も重要な根拠は、格理論がこの表示に適用されるという点でした。しかし、Chomsky（1986）は、存在文の詳細な分析を通して、格理論が表層構造ではなく、論理形式に適用されるべきであると論じます。このような背景の中で、Chomsky（1993）が束縛理論を論理形式に適用されるものとして再定式化し、極小主義プログラムが提案されるに至ります。深層構造を排した極小主義モデルでは、意味上の述部－項関係が論理形式においてのみ表示されればよいわけですから、軽動詞構文の分析も可能になります。実際、Saito and Hoshi（2000）は、この構文を極小主義理論を支持するものとしてとりあげているのです。

極小主義理論では、意味部門との接点をなす論理形式、そして音声部門との接点をなす音声形式という最低限必要な表示のみを仮定しています。句構造形成においても、基本的には、言語が言語として成立するために、最低限必要な操作のみを許容します。その操作とは、二つの要素からなる構成素を形成するものです。これがなくては、語または形態素を基にして、より大きな単位を生成することができません。Chomsky (1994) は、この操作を 'Merge' (併合) とよびます。具体例を考えてみましょう。文を形成するにあたって、(42a) に示す {A, B, C} という「材料」(語または形態素) が与えられたとします。

(42) a. {A, B, C}

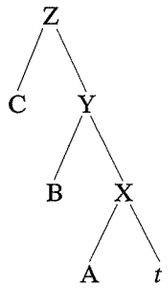
b.


c. {X, B}

d.


Merge は、(42b) のように、AとCを含むXを形成することを可能にします。この段階で、{X, B} が、Mergeを適用する際の与えられた材料となります。BとXを併合しますと、(42d) のように、Yという構成素が形成されます。

最大投射の移動も、Mergeの特殊な例として捉えることができます。派生が、(42d) に至ると、すでに「材料」を使い果たしていますので、Mergeを二つの独立した要素に適用することはできません。しかし、Yとそれに含まれるCを併合することはできます。その結果として得られる構造が、(43) です。

(43)


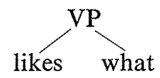
これは、Aの補部の位置にあったCを、Bの指定部に移動したものと考えることができます。

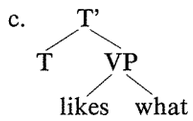
(44) の補文を例にとって、Mergeのメカニズムによる実際の文の派生を考えてみましょう。

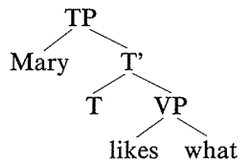
(44) John knows [what Mary likes]

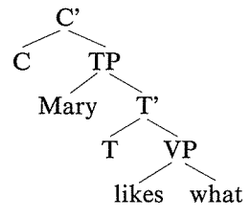
この補文を生成するためには、(45a) の「材料」が必要です。

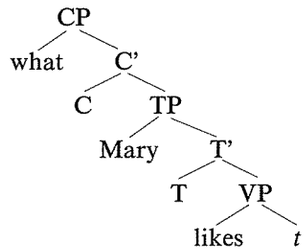
(45) a. {what, likes, T (pres), Mary, C (+WH)}

b.


c.


d.


e.


f.


(45b)－(45e) に示すように、与えられた「材料」にMergeを適用していくことによって、C'を形成することができます。その後、このC'と目的語の位置にある 'what' を併合しますと、(45f) のCPが生成されます。

二つの独立した要素を併合する際には、Mergeは、語の選択特性 (selectional properties) とは関係なく、自由に適用しうると考えられています。最大投射の移動も、Mergeの一種である限りにおいて、同様の性質をもつと仮定することができます。Mergeの自由な適用によって、(46a-b) のような非文法的な例も生成されますが、これらは、いずれも独立した理由で排除されます。

(46) a. *John knows [where Mary put]

b. *John knows [Mary likes what]

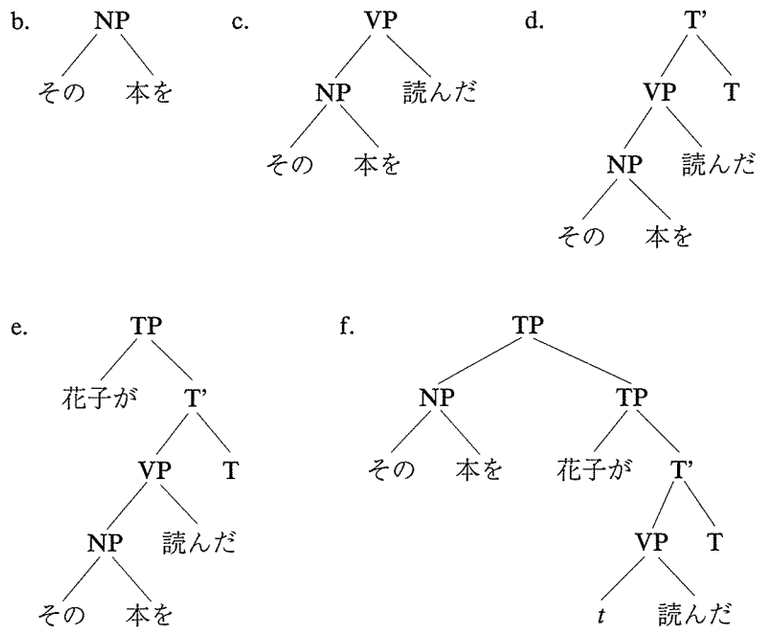
(46a) では、補文動詞が目的語を要求するにもかかわらず、目的語がありません。また、(46b) の場合は、補文が疑問文であるため、Cが指定部にWH句を必要としますが、この要求が充たされていません。次節では、このMergeのメカニズムに基づいて、スクランブリングおよび軽動詞構文の分析を再考します。

5. 文構造の日英語比較

前節で紹介したMergeを仮定しますと、スクランブリングも軽動詞構文も、当然あって然るべき現象として説明することが可能となります。まず、スクランブリングの例をみてみましょう。(47) の文を生成するためには、(48a) に示す「材料」が必要です。

(47)　その本を 花子が *t* 読んだ

(48)　a. {その、本を、読んだ、T(past)、花子が}



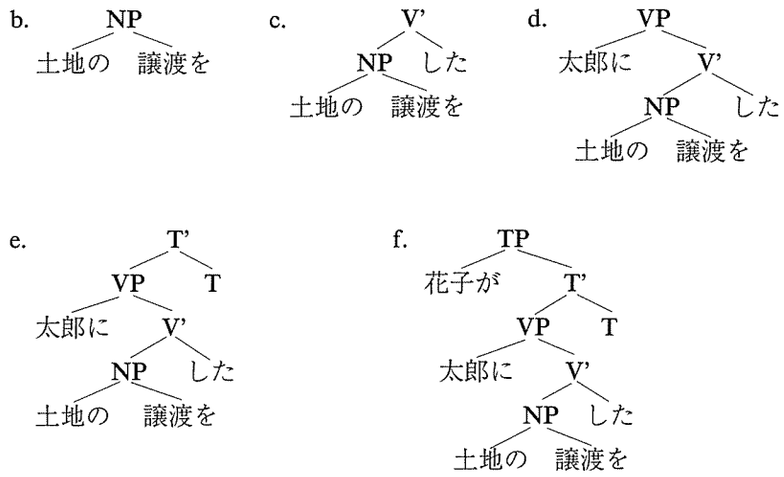
(45) の場合と同様に、与えられた「材料」にMergeを適用することによって、(48e) のTPを作ることができます。さらに、このTPと目的語の「その本を」を併合しますと、(48f) に示すように、(47) のスクランブリング文が生成されます。意味解釈にも問題がないようです。移動の痕跡が意味解釈において役割を果たしうるならば、(48f) の構造において、前置された名詞句は、正しく目的語として解釈することができます。

軽動詞文も、Mergeによって問題なく生成されます。

(49)　花子が 太郎に [土地の譲渡] を した

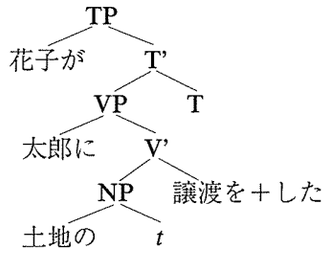
(49) の統語構造は、(50a) の「材料」を基に、(50b-f) に示すように生成することができます。

(50)　a. {土地の、譲渡を、した、太郎に、T(past)、花子が}



(50f) の構造に基づいて、意味解釈を適切に説明することは可能でしょうか。第3節の分析によりますと、「譲渡を」が軽動詞「する」の位置に、意味解釈を可能にするために移動します。この結果、(51) の構造が形成されます。

(51)



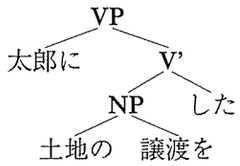
「譲渡を」の痕跡が「土地の」を項とし、動詞の位置に移動した「譲渡を」は、「太郎に」と「花子が」を項とすることができます。従って、(49) の論理形式である (51) において、文の述部－項構造が正しく表示されることになります。

以上の議論から、スクランブリングおよび軽動詞構文が、深層構造を排し、Mergeという文構造形成のメカニズムを仮定する極小主義理論の下では、極めて自然に分析できることが明らかになったかと思います。ここで、特に重要なのは、Mergeが、制限なく、二つの要素を自由に併合できるという点です。この仮説に従いますと、すでに意味解釈を受ける位置にある名詞句が、構造のより高い位置にさらに併合されてもよいことになります。これが、スクランブリングです。また、名詞句が意味解釈を受けない位置に併合され、その後、異なる操作によって意味解釈が可能になるケースも想定されます。軽動詞構文は、この種の例と考えることができます。

統語理論が、スクランブリングおよび軽動詞構文の存在を正しく予測するのであれば、英語においてこれらの現象が観察されないことが、むしろ説明を要する事実であることになります。なぜ、英語には、スクランブリングも軽動詞構文も存在しないのでしょうか。

第2節において、スクランブリングが、主要部の要求とは関係なく、自由に適用されることを論じました。WH移動は、指定部にWH句をもたなければならない疑問文のCの要求を充たすために、適用されます。それに対して、スクランブリングは、随意的な移動規則です。同様に、軽動詞構文も、Mergeの自由な適用によって、はじめて可能になります。(50d) の構造を再度みてみましょう。

(50) d.



派生のこの段階で、「太郎に」がV'に併合されますが、これは、V'の主要部である動詞の要求を充たすものではありません。「する」は、意味のない軽動詞であり、項をとらないからです。また、「太郎に」が「する」の項ではないからこそ、後に、「譲渡を」の項として解釈されうるのです。

他方、(45) の英語文の派生をみますと、Mergeが、常に主要部の要求を充たす形で適用されていることに気付きます。動詞 'like' は、目的語をとり、時制 (T) は、VPを補部に要求します。また、移動も、Cの要求を充たすために適用されます。従って、英語の特殊性として、Mergeの適用に以下の制限が課せられていると考えることができます。

(52) 英語の特殊性：Mergeは、主要部の要求を充たすためにのみ、適用できる。

(52) を仮定しますと、時制 (T) が要求しない要素を随意的にTPと併合することができません。よって、英語にスクランブリングがないことが説明されます。また、(52) から導かれるいま一つの帰結として、動詞（あるいはその投射）と名詞句の併合が、前者が後者を項として要求する場合にのみ可能であることがあげられます。つまり、この制約がある限り、軽動詞構文の基礎をなす (50d) のような統語構造をそもそも派生することができないのです。従って、(52) が適用される言語では、軽動詞構文が存在しえないことになります。

より一般的には、(52) は、Mergeが、意味関係を直接的に反映する形で適用されることを義務付けます。名詞句は、それを項とする動詞とのみ併合され、演算子は、それを必要とする構成素とのみ併合されることができるのです。この分析が正しければ、英語の文構造を「論理的」にしているのは、人間言語における句構造形成の一般的なメカニズムではなく、英語に特有の制約であるという結論が導かれます。

6. 結論

本論文では、日本語の「意味不明」あるいは「非論理的」と思われる統語現象を手掛かりとして、日英語における文構造形成のメカニズムを考察しました。「意味不明」であるスクランブリングも、「非論理的」である軽動詞構文も、極小主義理論で仮定されているMergeを自由に適用することによって、論理的な説明が与えられます。その意味においては、これらの現象は、「意味不明」でも、「非論理的」でもないと言うことができます。Mergeの自由な適用を認める限りにおいて、極小主義理論は、文構造が、意味構造を直接反映したものであることを要求しないのです。

この結論に到達した段階で、むしろ、なぜ、英語において、スクランブリングも軽動詞構文もなく、文構造が、「論理的」であるのかが問題となります。本論文では、英語に特有の制約として、(52) が存在することを提案しました。この仮説に従いますと、(52) があるために、英語の文構造が、意味上の述部－項関係を忠実に反映した形で生成され、また、英語における移動が、主要部の要求を充たすためにのみ適用されるという結論に至ります。

生成統語論は、英語の研究を中心にして発展してきましたが、英語が (52) に示す制約をもつ言語であったゆえに、深層構造という概念が提案されたのかもしれません。また、日本語は、(52) が適用されないことから、深層構造を排した極小主義理論をより忠実に反映する言語であるとも言えます。このことは、今後の日本語研究、日英語比較研究の成果が、極小主義理論をさらに大きく発展させる契機となりうることを示唆するように思います。

参照文献

Chomsky, N. (1957) *Syntactic Structures*, Mouton, The Hague.

Chomsky, N. (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris Publications, Dordrecht.

Chomsky, N. (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.

Chomsky, N. (1993) "A Minimalist Program for Linguistic Theory," in K. Hale and S. J. Keyser, eds., *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honor of Sylvain Bromberger*, MIT Press, Cambridge, Mass.

Chomsky, N. (1994) "Bare Phrase Structure," MIT Occasional Papers in Linguistics #5.

Chomsky, N. (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, Mass.

Grewendorf, G. and J. Sabel (1999) "Scrambling in German and Japanese: Adjunction versus Multiple Specifiers," *Natural Language & Linguistic Theory* 17, 1-65.

Grimshaw, G. and A. Mester (1988) "Light Verbs and Theta-Marking," *Linguistic Inquiry* 19, 205-232.

Hale, K. (1980) "Remarks on Japanese Phrase Structure," *MIT Working Papers in Linguistics* 2, 185-203.

Harada, K. I. (1972) "Constraints on WH-Q Binding," *Studies in Descriptive and Applied Linguistics* 5, 180-206.

Harada, S.-I. (1973) "Counter Equi NP Deletion," *Annual Bulletin of the Research Institute of Logopedics and Phoniatrics* 7, University of Tokyo, 113-147.

Kidwai, A. (2000) *XP-Adjunction in Universal Grammar: Scrambling and Binding in Hindi-Urdu*, Oxford University Press, Oxford.

Kuroda, S.-Y. (1978) "Case-Marking, Canonical Sentence Patterns, and Counter Equi in Japanese," in J. Hinds and I. Howard, eds., *Problems in Japanese Syntax and Semantics*, Kaitakusha, Tokyo.

Kuroda, S.-Y. (1988) "Whether We Agree or Not: A Comparative Syntax of English and Japanese," *Linguisticae Investigationes* 12, 1-47.

Larson, R. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.

Riemsdijk, van H. and E. Williams (1981) "NP-Structure," *The Linguistic Review* 1, 171-217.

Saito, M. (1989) "Scrambling as Semantically Vacuous A'-movement," in M. Baltin and A. Kroch, eds., *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, University of Chicago Press, Chicago.

Saito, M. and N. Fukui (1998) "Order in Phrase Structure and Movement," *Linguistic Inquiry* 29, 439-474.

Saito, M. and H. Hoshi (2000) "The Japanese Light Verb Construction and the Minimalist Program," in R. Martin, et al., eds., *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, MIT Press, Cambridge, Mass.

Sells, P. (1988) "More on Light Verbs and Theta-Marking," unpublished manuscript, Stanford University.

Shibatani, M. (1973) "Semantics of Japanese Causativization," *Foundations of Language* 9, 329-373.